報　告

昭和61年度共通第１次学力試験の実施結果

昭和61年度共通第１次学力試験は，各国公立大学及び産業医科大学と大学入試センターとの緊密な連携のもとに，昭和61年１月25日（土），26日（日）の両日，全国292会場で，360,306人の志願者について一斉に行われた。

今回の試験は，昭和57年度から実施された高等学校の新教育課程を履修した者を対象とした２回目であり，旧教育課程履修者に対する経過措置の２年目（本年度限り）として実施されたが，一部の地域の試験場で，列車踏切事故及び降雪による交通機関の遅延のため試験時刻の繰下げが行われたことを除き，当初の計画のとおり実施され，無事終了した。

1　実施方法等の決定・発表

昭和61年度共通第１次学力試験の実施に当たっては，本年度は新教育課程による共通第１次学力試験の２回目及び旧教育課程履修者に対する経過措置の２年目（本年度限り）であることから，実施方法等の変更は行わず，ほぼ前年度と同様の方法で行うこととし，昭和60年６月20日，「昭和61年度大学入学者選抜共通第１次学力試験実施要項」を決定した。また，この実施要項に基づいた「受験案内」を作成し，志願者や高等学校関係者に交付した。各大学の入学試験実施担当者に対しては，７・８月及び12月の２回にわたり実施担当者会議を開催し，試験の実施，業務の処理日程及び各種の事故対策等の細部にわたる説明・協議を行い実施に万全を期すとともに，高等学校，教育委員会，PTA等関係者に対しては，７・８月に共通第１次学力試験の説明協議会を全国７地区で開催し，試験の実施に関する諸事項について説明を行うとともに，協議の機会を持ち，その周知を図った。

2　志願状況等

(1)　志願者数

出願受付は，昭和60年10月30日から11月８日までの間，高等学校卒業見込みの者は在学する高等学校を経由して，高等学校を卒業した者等については直接大学入試センターへ郵送することにより行われ，志願者数は，360,306人となり，前年度より23,949人増加した。

また，高等学校卒業見込者（現役）の志願率は14.4％と前年度より0.7％低下した。

(2)　大学・学部別志望状況

大学・学部別の平均倍率は，志願者が約24,000人増加したものの，昭和61年度政府予算案において入学定員増（臨時増募及び恒常増）が行われることにより，前年度と同率の3.5倍となった。学部系統別でみると，「農水産系」，「薬系」及び「教員養成系」でそれぞれ増加し，「人文・社会系」，「理工系」及び「医・歯系」が同率，「その他」が減少した。

(3)　試験場

志願者数の確定後，各国立大学は公立大学と協力して志願者数に応じた試験場を設定した。試験場は，各大学の施設を当てることを原則としているが，収容能力を超える大学については，高等学校等を借用し，全国で292会場に及んだ。

(4)　受験票等の発行

受験票等の志願者への発送は，12月９日から13日までの間に行った。受験票等は，高等学校等卒業見込者（通信制課程を除く。）については在学する高等学校等を経由し，本人に送付したが，その後，未着・紛失・破損等による再発行申請が約1,600件あり，直ちにこれらに応じた。

3　共通第１次学力試験の実施

(1)　試験の実施

共通第１次学力試験の本試験は，１月25日，26日に全国292会場で一斉に行われた。また，病気等の理由により本試験を受験できなかった者を対象にする追試験は，２月１日，２日に東京芸術大学及び京都大学の２会場で行われた。

本試験及び追試験の全教科を受験した者は，343,651人で，このうち追試験の受験者は，133人であった。また，欠席者数は16,655人，欠席率4.62％で，前年度より0.09％高くなった。欠席状況を現浪別にみると，２浪以上が12.5％と最も高く，現役3.9％，１浪2.6％となっている。志望学部系統別では，「医・歯系」8.1％，「人文・社会系」が5.2％と高い率を示しており，現浪別，志望学部系統別とも前年度とほぼ同じ傾向となった。

身体に障害のある志願者247人（出願受付時188人）については，障害の種類・程度に応じ，受験の際，特別の措置がとられた。

(2)　試験問題

共通第１次学力試験の試験問題は，

「高等学校の段階における一般的・基礎的な学習の達成の程度を判定する」ことを目的としており，今回の試験問題の内容については，広く一般から意見が寄せられているが，全般的に適切な出題であるという評価を得ている。

なお，大学入試センターでは，試験終了後から高等学校側の意見を聞くなど，分析・研究を行っているところであり，今後の問題作成に反映させることとしている。

4　共通第１次学力試験の結果

(1)　答案の採点

共通第１次学力試験の志願者360,306人のうち，所定の全教科・科目を受験した343,651人の答案約171万枚は，各国公立大学で取りまとめられ，大学入試センターへ返送された。大学入試センターでは，これらを１月27日から光学式マーク読取装置で読み取り，電子計算機により採点した。

(2)　実施結果

本年度の実施結果については，前年度同様，第２次試験の出願前に平均点等の最終発表が不可能なため，２月６日に全教科及び各教科・科目の中間結果に基づく全国平均点の予測値を中間発表した。また，本試験の所定の全数科・科目を受験した343,518人の最終結果をまとめた総得点，科目別平均点，標準偏差，最高点，最低点及び総得点の得点分布などは，２月19日に報道機関を通じて発表した。

全教科の平均点は，622.52点で前年度より4.51点下回ったが，過去４番目に高い点数であり，平均点が６割を上回ることとする目標は十分達成できたと考えている。

教科別にみると，「社会」(128.49点) 2.09点，「数学」(123.45点) 7.22点及び「外国語」(125.16点) 6.95点それぞれ前年度を上回ったが，「国語」(120.47点) 17.66点，「理科」(124.95点) 3.11点それぞれ低下した。特に，「国語」の低下が，前年度より平均点を4.51点下げることとなったと考えられる。

また，科目間の平均点の差を縮小することは，かねてからの懸案であり，今回は「社会」で最高の「世界史」(62.45点) と最低の「日本史」(54.34点) との差が8.11点（必須科目である「現代社会」及び「倫理，政治・経済」を除く。）と，ほぼ目標内（10点差以内）に納まった。一方「理科」では，最高の「物理」(71.69点) と「地学」(59.94点) との間に11.75点（必須科目である「理科Ｉ」を除く。）の差が生じた。この点について，その内容を研究・分析したところ，「理科」の科目間の点差は，受験者集団の学力差に起因しているものであることが判った。

試験問題の作成に当たっては，試験問題の作成段階から，過去の実施結果を研究分析するほか，試験問題そのものの工夫・改善に務めているが，今後できる限り差の生じないように調和のとれた問題を作成する努力をしたい。

5　成績の各大学への提供

大学入試センターでは，各国公立大学及び産業医科大学からの成績の請求を受けて，それぞれの大学の入学志願者の総得点，教科・科目別の得点等について，資料の提供を行った。